

傘をなくした経緯の記憶がよみがえる糸余曲折の六月の恋 宇都宮とよ

ふと何かの折に、小さな灯りがともるよう遠い過去の記憶の断片がふと浮かびあがり、少しづつ鮮明に具体的なたちをとつてゆくことがある。だれでも体験したことがあるはずだ。そんなスリリングな心の状態を的確にうたつて魅力的。「傘」という具体的なものへの出し方が絶妙。

街灯の頂きに立つ青鸞の頸伸ばしたる嘴の影

佐藤博之

図的に魅力ある一首。シンプルで直線的なシルエットが読者の心に投影され、不思議な気分にしてくれる。

ただ、「街灯」とあるので読者はふつう夜を思い浮かべる。場面は夜なのだろうか。

さよならを試してみたい終電車手すりのやうな君に凭れて

原尚美

下句「手すりのやうな君」というユーモラスな言い方が、歌を軽やかにしている。パフォーマンスとして、一度別れを演じてみたい、心にきざしたそんな思いつきを表現した一首と思う。これも恋愛の一場面。

ホホジロの番まだゐる鳴きはじむ坐り直してわれも

まだゐる

足立晶子

長さにして五分ぐらいの時間だろうか。何ということはないその時をうたつていて。短い時間ながら、これも人生の一場面。「番まだゐる」「鳴きはじむ」「われもま

だゐる」という三つの終止形が、うまくリズムを刻んでいる。

白薔薇はしなつて雨を振り払いゾゾッと立つてガガ

つと見開く

雨降る中に花開いた薔薇の勢いを、オノマトペをもちいて動きとして表現。一般的な白薔薇の楚々とした印象をうち破つて、動物的なイメージに仕上がってユーモラスな味を出す。

昨夜よりの雨止みにけりテニスコートに雀の貌を映す水あり

本田一弘

クラシックなうたい出しではじまりつつ、下句、水を飲む雀の貌が突然クローズアップされて読者の心に映し出される。映像が楽しい。

くるしめる水となりても輝けよぶつかる潮の音を聞きをり

山本枝里子

鳴門の渦潮をうたつた作らしい。上句の抽象的な表現を、「われ」の立ち位置を示す下句とたぐみに組み合わせていく。「ぶつかる潮の音」が端的で、うまい。

客船はここには来ない港町これより先は心の旅路

壱乃村春彦

漁船や乗り合い船などが出入りする小さな港町のなつかしい空気をうまく一首にまとめて心に残る。

が、結句「心の旅路」は出来合いのフレーズをそのまま借りている点が気にかかる。ちょっと調べてみると、「心の旅路」というタイトルの小説があり、映画があり、

短歌の現在

No.401 今月の15首を読む

佐佐木幸綱